

## 卷頭言

# 無量寿無量光

学長 水谷 幸正

夏の一夜、戸外に出て天空一杯に拡がるあまたの星を、心ゆくまで眺める。常識では考えることのできない光年という距離感もさることながら、暗黒の不可視の彼方の存在に想いをはせる。

今年の話題作の一つに『宇宙からの帰還』（立花隆著）がある。宇宙飛行士たちによる人類未曾有の体験を紹介したドキュメンタリーな好著である。宇宙から地球を見るとき、そのあまりの美しさにうたれつつ、神がそこにいますということの、いわば神とのであいから人間存在の本質を実感するという、宇宙感覚というか宇宙精神のごときものを教えてくれる。かれらは宇宙を旅行することによって、新しい意識や知性を体得したのであった。

かれらのすばらしい体験に感嘆しつつも、いまこの夜空をみつめながら、この体験談さえも、無限の空間の中のごく一部の、そして永遠の時の流れの中の一瞬の、できごとにしかならないのではないかとおもわれてくる。星空の世界は、やはり、ファンタジー豊かなロマンの世界なのだ。

ところで、最近の報道によると、かの織女星の周りに、第二の太陽系ともおもわれる惑星群の存在が明らか

になり、天文学者がいろめきたっているという。この第二太陽系の惑星群は約十億年の歴史をもっているのみなされており、その状態がはっきりわかれば、地球における生命誕生の秘密を探ることができるであろう。織女と牽牛のロマンの夢をさます大発見というべきであろう。しかし、これとてもやはり宇宙の中のごく微細な部分のありようにしかすぎない。

星空のはるか彼方にいま何が生じ何が起っているか知るすべもない。天文学や惑星物理学で知り得たことは宇宙の神秘のヴェールの一片をはいだにすぎない。宇宙生成のはじまりに想いをいたすとき、無限の時間の流れ、そして無限の空間のひろがりを感じずにはおれない。むしろ、時空を超越した「大いなるもの」のはたらきが、いまここに生きるこの私そのものであるような気分になってくる。かの梵我一如の境地を少しは味わったことになるのであろうか。

無限の時間の流れを無量寿といい、無限の空間のひろがりは無量光と名づけるならば、まさに無量寿無量光こそ「大いなるもの」「大いなるいのちの世界」なのである。永遠無限の宇宙大の「いのち」を無量寿無量光というのである。無量寿無量光を阿弥陀仏という。阿弥陀仏の「いのち」を頂いて、いまここに生かされて生きているのである。

このところを「縁起」という仏教思想によって説明することができるが、それはそれとして、星空の彼方から感得せしめられる大いなる「いのち」の世界からはたらきかけを通して、あたかも宇宙飛行士が感じたような神とのであい、言いかえれば、阿弥陀仏の救いをひしひしと感ぜしめられる。星空いっぱいひるがらみ仏の「いのち」を胸いっぱい吸い込んで屋内に入る。